

# 日本で生まれ育った仮放免者として

## My life as a foreigner on provisional release, born and raised in Japan

クアテン ユニス / Kwarteng Eunice

私は日本で生まれ育ったガーナ人です。しかし、物心ついた頃から日本社会の一員としての自覚は強く持っています。つまりガーナ人である以上に日本人である、と思って生きてきたのです。

私は海外留学するという夢を持っていましたが、いまだにかなえることができていません。その原因は、私の少し特殊な在留状況に関係しています。このエッセイでは、日本で生まれ育った外国人としての苦労や経験も織り交ぜつつ、私の少し特殊な「事情」について書いていきたいと思います。

### 保育園～小学校時代

群馬県で生まれた私は、元気に育っていきました。3つの保育園に通いましたが、どこにいてもうまく溶け込めて、楽しい保育園生活を過ごせました。

ローズピンク色のランドセルを購入し、待ちに待った小学校に入学すると、初めての試練に遭いました。近所に住んでいた年上の男の子たちに、名前を馬鹿にされたのです。今思い返せば、笑い話になる程度のものでしたが、当時の私にとっては大問題でした。母を通して先生に報告すると、真剣に取り合ってくれてすぐに問題は解決しました。小学校生活に慣れていくにつれ友達もでき、一番下の弟も生まれました。

しかし弟が生まれた数ヵ月後、わが家に大きな苦難が降りかかってきました。オーバーステイとなり、在留資格をなくしてしまったのです。当時7～8歳だった私は、このような大人の事情を知る由もありませんでした。在留資格を失った後の生活状況は厳しいものでしたが、私の家族はクリスチャンでもあるので、毎週教会に通い、神様が助けしてくれることを強く信じていました。

ある冬、家にあった食料が底をつき、最後のお米を炊いた日があったと母が話してくれました。母は神様が奇跡を起こしてくれるよう、祈ることしかできなかったそうです。すると5分と経たないうちに電話があり、それは知り合いのクリスチャン家族がわが家を訪問するとの連絡でした。大量の食料と灯油まで買って遠くから訪ねてくれたのです。普段どおりに仕事に行っている時、ふと、

私たちのために食料を買うよう強く感じたのだそうです。私は細かい事は知りませんでしたが、突如大量の買い物袋を持ってこの家族が家に来たことは覚えています。それぐらい衝撃的な出来事でした。

このように私の家族は、神様と教会の友人や親族の助けを得ながら、なんとか生き延びてきました。海外に住む親族が箱いっぱいの洋服を送ってくれたことも何度もありました。私は神様が本当に存在していること、そしていざという時に助けてくれる存在であると信じています。当時、このような状況にいながらもまだ幼かった私は、在留資格がないことの深刻さをあまり理解できていませんでした。

### 中学校時代

中学校は、隣町にある公立の中高一貫校に入学し、電車で通学しました。部活が始まると、とても忙しい生活が始まりました。それと同時に、定期的な集金、部費、ユニフォーム代、電車の定期代などを用意するのに両親が苦労している様子を見て、少しずつわが家の状況を理解していきました。学校からの集金袋を出すときは、いつも親の顔色をうかがっていたのを覚えています。在留資格をなくし、仕事をするのを法律で禁止されていたため、常にお金がなかったのです。私の両親は、日本の生活を続けられるよう再び在留資格を得ようと試みていました。しかしこの試みは容易ではなく、私の家族は当面の間「仮放免者」として生活が続いたのです。

このような状況にいながらも私たちは、「きっと在留資格はもうすぐ出る。ビザをもらったら、狭い団地から引っ越してマイホームを建てよう」と希望を持ち続けていました。私自身も、「高校に入ったら自分の部屋が持てるし、バイトもできるようになる。大学は絶対海外留学をしたい」と状況をポジティブにとらえようとしていました。しかし、現実はそう甘くはありませんでした。

### 高校時代

高校に入学し16歳になると、1人で入管（出入国管理庁）に出頭することになりました。「仮放免者」は定期的に仮

くあてん ゆにす：日本生まれ日本育ちのガーナ人。両親、妹、弟との5人家族。2000年に群馬県館林市で生まれ、現在東京外国語大学4年生（言語文化学部フランス語専攻）。大学のゼミではコミュニティー通訳や多文化共生について学ぶ。趣味は読書とYouTubeで世界の料理／旅行動画を観ること。

放免延長の許可を申請しなければなりません。原則は1ヵ月ごとの更新ですが、私はまだ高校生だったため、3ヵ月に一度学校を休み、2時間かけて東京の品川まで行き、申請手続きを行っていました。また、私が住んでいる県から県外へ出る用事があるときは、入管で「一時旅行許可申請書」を出し、許可を取る必要があります。修学旅行に行くときも、詳細な旅行計画を提出してやっと入管の許可を取ることができました。

「仮放免者」は仕事ができない、国民健康保険に加入できず医療費は全額自己負担になる、高校の授業料無料化からも外されるなど、基本的な生活を送るために必要なことがことごとく否定されています。

あれもできない、これもできないという生活に、そろそろ私も我慢の限界になってきていました。2週間ほどアメリカにホームステイする留学プログラムへの参加ができなかった時は、悔しい気持ちでいっぱいでした。「私がビザをなくしたときは、ビザの存在すら知らなかった。何も悪いことをしていないのに、どうして入管は当時の状況を考慮してくれないんだろう」。この疑問を入管の職員に直接聞いたこともありましたが、満足のいく答えは得られませんでした。

「仮放免者」になると、基本的に強制送還されてしまいます。入管に出頭するたびに、「いつ強制送還されてもおかしくないから」と言われ続けます。まるで自分が罪を着せられているようで、不満と不安は強まっていくばかりでした。「生まれたときからまわりの日本人の子どもと同じ授業を受け、同じ給食を食べて、同じ学校教育を受けてきた。親はガーナ人だけど、心は日本人により近い。外国籍に生まれたというだけでどうしてこんな目に遭わなきゃいけないんだ。日本人にさえ生まれていたら……」と、いつも考えていました。

家族の期待もむなしく、在留資格を得られないまま時は過ぎていきました。進路選択の時期になり、小学生の頃から言語面で両親をサポートしていた経験から新たな言語を学びたいと思い、東京外国語大学を目指すことにしました。

## 大学時代

東京外国語大学の言語文化学部フランス語専攻に無事合格し、寮での一人暮らし生活が始まりました。まだ「仮放免者」で、バイトをすることはできなかったため、生活費はいつもカツカツでした。寮の家賃の支払いも遅れ、何回も管理人に呼び止められて注意を受けました。「わざとじゃないのに……」と思っても、管理人に家庭の状況を説明するわけにもいかず、もどかしい思いをしました。コロナ禍でオンライン授業になったこともあり、3年次からは自宅に戻りました。奨学金の申し込みもしましたが、銀行口座を開設できなかったことから、奨学金の給付を断られました。幸い、学費は免除してもらうことができました。

また、友達から留学の話などが出ると、なんとかはぐ

らかしてその場をやり過ごすことも何度かありました。留学だけでなく、国内の移動も自由にできず、授業の後に友達と出かけることもできません。毎月入管に申請している大学への通学、所属教会での礼拝以外は、どこに行くにも入管に出向いて、「一時旅行許可」を申請する必要があるのです。

大学では、専攻したフランス語だけでなく、ゼミでコミュニティー通訳や多文化共生について学びました。コミュニティー通訳は、日本語が不得意な外国人を、司法や医療など日常生活のあらゆる場面でサポートする通訳です。卒論では、「日本における仮放免者等の生活実態」というテーマで、調査し、執筆しました。仮放免者や支援者の方たちにインタビューも行い、仮放免者が直面している状況をより理解・考察することができ、それを伝えていく必要性を感じました。

## 私の夢

私は生まれたときから日本に住み、住んだことのないガーナより、日本を母国と感じてきました。しかし、今の制度ではいつまでも部外者、仲間外れにされています。日本で今後、外国につながる子どもの数は、どんどん増えていくと思います。日本に多様化をもたらし、十分に社会に貢献していける子どもたちがたくさんいます。そのような子どもたちが入管問題によって未来や夢を奪われてしまう状況は日本社会にとっても、子ども本人にとっても何の益もないと思います。

私は、大学卒業間際になっても在留資格の問題が解決していないため、就職もできない状況です。それでも、私は日本という国が好きです。私は冒頭で、海外留学する夢があると言いました。今はそれ以上にかなえたい夢があります。それは自分が生まれ育った国の社会の一員として認められることです。

